



More Perfect Software.

例えば、あなたの会社のECサイト、ページレスポンス速度を向上すると売上がどれだけ増えると思いますか？システムの障害発生時、運用チームが瞬間的にコードレベルで原因を特定できればどれだけ機会損失を防げるでしょうか？開発チームはどの機能に投資をすればユーザーは満足してサービスを継続利用してくれるでしょうか？

これらはNew Relic が解決できるほんの一部の問題にすぎません。

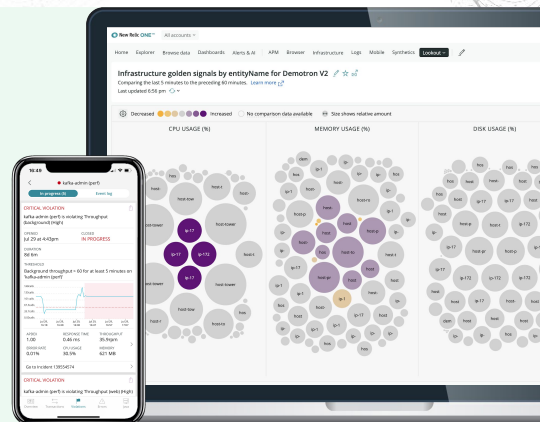
New Relic はたった1ライセンスで、システムの規模に関係なく、モバイルやブラウザ、アプリケーションからインフラまであらゆる領域のシステム状態を一元的に把握、エンジニアチームが常時システム性能を改善することを可能にします。このリアルタイム・システム分析の力は「オブザーバビリティ可観測性」と呼ばれ、デジタルビジネスを展開する企業の必須能力として採用されています。New Relic はこの「オブザーバビリティの力」を1つのプラットフォームに凝縮して提供することで、あらゆる企業が「より完璧なデジタルビジネス」を実現するお手伝いをしています。

New Relic 株式会社

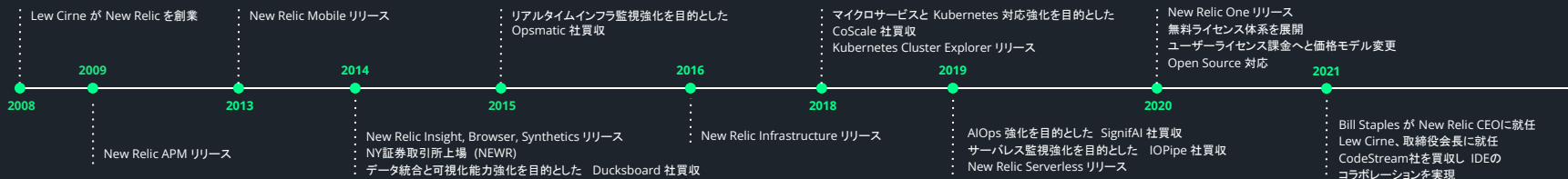
所在地	東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウンタワー 18F
設立	2018年
代表取締役社長	小西 真一郎
事業内容	オブザーバビリティ・プラットフォームの提供

New Relic, Inc

創業者	ルー・サーニー
CEO	ビル・スティブルズ
設立	2008年
上場市場	NYSE: NEWR
従業員数	約 2,700人
拠点数	16 拠点
売上	\$926M (2023年3月期通期決算)



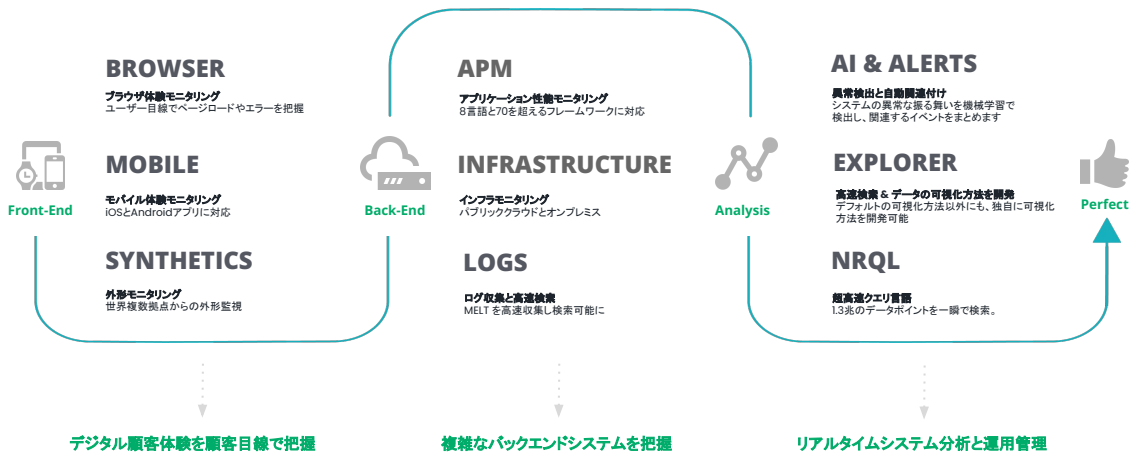
Company Milestones



New Relic

フロントエンドからバックエンドまで全てのデータを追跡し高速に分析

New Relic は1つのユーザーライセンスで、システムの規模を問わずフロントエンドからバックエンドまで以下の機能が使えるようになります。これら全てのデータは分散トレーシングによって追跡され、ユーザーがクリックしてから処理が返されるまでの全てを収集し、分析可能な状態を提供します。



デジタル顧客体験を顧客目線で把握

ユーザ目線であらゆるパフォーマンス指標を計測。ページロード時間、エラーの発生、JavaScriptの挙動、AJAXの呼び出し把握、SPAフレームワークへの対応などはもちろんのこと、モバイルではiOS/Androidのどちらにも対応しクラッシュ理由をコードレベルで追跡可能。バックエンドとも分散トレーシングで繋がりがフロントエンドとバックエンドの影響をリアルタイムに把握することができます。システム内部からだけでなく、外形監視としてユーザーのログイン、検索などをスクリプト化してテスト、ユーザー目線でのSLA計測も容易に可能。

複雑なバックエンドシステムを把握

アプリケーションの依存関係やボトルネック、あらゆるモダンインフラ環境を計測。Java、.NET、PHP、Ruby、Goなど8言語と75のフレームワークに対応し、性能劣化の根本原因をコードレベルで把握可能。オンプレミス環境はもちろん、AWS/Azure/GCPなどのクラウド環境、KubernetesやLambda等のモダン環境も難なく可視化。パフォーマンスのボトルネックになっているトランザクションを高速にドリルダウンし、関連するログまでをシームレスに検索可能。Fluentdなど各種OSSに対応しており、ログの統合も可能。Logs in Context機能がエラーや異常挙動のトランザクションを自動で関連づける。

リアルタイムシステム分析と運用管理

New Relicに蓄積された全データでNRQL(New Relic Query Language)によって高速検索、自由度高く分析、可視化を可能にする。ダッシュボードによる可視化は標準的な形式であれば特定のサービスやアプリケーションで自動生成。標準的な形式で不足する場合は独自に開発可能。さらに機械学習機能がフロントエンドからバックエンドまでを含め異常挙動の抽出と関連するインシデントの自動紐付け、レスポンドルーティングも実行。既知の問題だけでなく未知の事象を特定するだけでなく、アラートノイズを大きく削減、障害対応の自動化を推進し、MTTRの超高速化を可能にする。



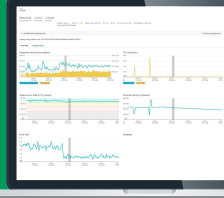
開発での使い方

開発生産性の向上

本番環境で性能問題が発生した時、カナリアリリースで影響を回りたい時、どのようなケースでもデプロイの前後でコードレベルでの問題特定が可能です。開発者は問題修正にかかる時間を最短に短縮でき、新機能開発の速度向上、コードの品質向上につながります。

得られる効果指標の例

TTM (Time to Market) 短縮
デプロイ頻度とアップデートサイクル向上



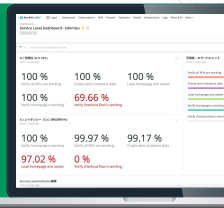
運用での使い方

高信頼性/安定運用/事業継続性

運用に期待されることはインフラの保守ではなく、サービスの安定稼働です。SREとしてサービスレベルを中心とした指標計測から、障害発生時の問題特定、改善ポイントの特定までを高速化することができ、サービス可用性を大きく向上させることに貢献します。

得られる効果指標の例

MTTR (平均障害回復時間) 短縮
サービスレベル/サービス継続性の維持向上
顧客満足度向上



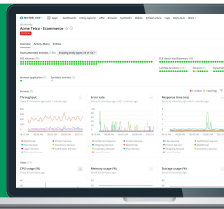
システム設計での使い方

システムの費用対効果を最大化

効率性の高いシステムを設計するには、効率性を計測できる必要があります。必要なキャパシティとレイテンシを常時計測することでアーキテクチャに必要なシステム要件を明らかにし、インフラリソースの消費も最適化することができます。

得られる効果指標の例

クラウド移行に伴う問題の削減
クラウドコストの最適化



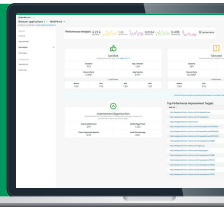
プロダクト管理での使い方

サービスの顧客満足度と収益性の成長

プロダクトの責任者は、顧客満足度を向上させ収益性を拡大する責任があります。オプザバビリティを備えれば、次に必要な機能の投資判断や、定着率や解約率などビジネスメトリクスとシステムを関連づけて把握し、市場が求める完璧なソフトウェアを提供できます。

得られる効果指標の例

売上/システムコスト
顧客満足度
ユーザー数/定着率等



16,000 Customers Globally



受賞歴

Gartner

Gartner Magic Quadrant APM Suite 部門で 10年連続 リーダーに選出¹



Gartner Peer Insights Customers' Choice 2021 APM 部門を受賞²



IDC WW APM レポートでシェア No.1 を獲得³



日本国内カスタマーエクスペリエンス市場でオンライン、SaaS総合市場共にシェア No.1 を獲得⁴



Fortune誌 Best Workplaces for Millennials 2022に選出⁵

コンプライアンスと認証



New Relicは、ISO/IEC 27001:2013 (ISO 27001)の要件を遵守しています。この認定は、New Relic Oneプラットフォームを対象とし、統合、ツール、アプリケーションをサポートする情報およびビジネス活動の管理を対象としています。



New Relicは、米国内務管理事務局との間で、連邦リスクおよび認可管理プログラム (FedRAMP) の運営権限を達成しました。FedRAMP ATOにより、New Relicは、FIPS199「中程度」セキュリティへの影響レベルで動作するシステムのクラウドサービスプロバイダーとして採用できます。



New Relicは、AICPA SOC2 業界標準のセキュリティ監査を毎年受けており、2013年から例外なく合格しています。データセンターとエージェントだけでなく、社内のセキュリティポリシー、プロセス、および内部セキュリティポリシーについても、最高レベルで検証されています。



New Relicは、国土安全保障省の継続的な診断および軽減 (CDM: Continuous Diagnostic and Mitigation) 製品として認証されています。



New RelicはCSA STARの自己評価を受け、セキュリティ管理を文書化し、CSA STARレジストリで公開しています。これは、クラウドセキュリティの重要な原則である、透明性、厳格な監査、標準の調和、継続的なモニタリングを遵守していることを示しています。



New Relicは、製品内の個人データを処理することを選択したお客様がGDPRおよび適用されるデータ保護法に従って処理できるようにするための措置を講じています。当社は、パフォーマンスデータに個人データを含めることを希望するEUAのお客様をサポートするために、当社の慣行および契約が準備されるように努めています。NewRelicはEU-US and Swiss-US Privacy Shieldの両方を認証しています。

New Relicのミッション

日本にはシステムエンジニアが 100万人いると言われていますが、その多くのエンジニアは就業時間の約 8割を運用・保守という現状維持に費やしている現状があります。つまり新たなサービスや技術に投じている時間は 2割しかないということです。しかしコロナ禍と DX加速が企業変化に不可欠となった現在、エンジニアの力こそが、デジタルビジネスを展開する企業の力と言っても過言ではありません。

New Relic はエンジニアの力を解放し、新たなサービス開発や信頼性向上に自分の時間を当ててもらうことを可能にします。金融決済サービス、製造の IoT、MaaS、SaaS、小売、EC、ゲーム、SIと導入事業は業界を問うことはありません。実際 New Relic を使い障害発生から復旧まで 3日かかっていたところをわずか 1時間に短縮したり、5人必要だった SaaS の運用管理負担を 1/5まで軽減した事例など、エンジニアの生産性を高めることができます。日本のエンジニアは技能の面で世界のエンジニアに負けている訳ではありません。

New Relic が提供するオプザバビリティを使って、運用役務の時間を減らし、サービスの開発や顧客満足度を向上させるためのサイクルに思いつく限り組んでいただきたい。New Relic は日本が誇るエンジニアの能力を発揮するお手伝いをしていくことをミッションとしています。

小西 真一郎
代表取締役社長



¹New Relic Named a Leader in the 2022 Gartner® Magic Quadrant™ for APM and Observability for 10th Consecutive Time

²New Relic again recognized as a 2021 Gartner Peer Insights Customers' Choice for APM Suites

³IDC market shares report names New Relic leader in APM

⁴New Relic、日本国内のカスタマーエクスペリエンス市場でシェア首位を獲得

⁵Fortune、Best Workplaces for Millennials™ 2022



無料ライセンスを使う

New Relic は所定の利用規模を超えない条件に限って無料ライセンスを提供しています。
自動更新される従量課金契約ではなく、年間契約消費型の契約モデルを採用しているため、利用中に自動請求がかかることはありません。以下の URL からサインアップするだけで全機能を利用することができます。

newrelic.com/jp/signup

無料ライセンス概要

Full Stack Observability | **1ユーザーまで無料**
リアルタイムシステム分析を可能にするベストプラクティス・ビュー

Telemetry Data Platform | **100GBまで無料**
OSSを含めたリアルタイムデータ収集と一元管理、データ分析、アラート設計

New Relic 製品や使い方を学ぶ

New Relic は使い方や製品知識の習熟に必要なトレーニングを全て無償で提供しています。
基本的な製品利用を開始するためのハンズオントレーニングを毎週開催しており、いつでも New Relic のトレーニングを開始することができます。以下の URL で開催スケジュールを確認し登録することができます。

newrelic.com/jp/events/seminar

オンデマンドセミナー、ハンズオントレーニング

New Relic University 101 | **オンデマンドセミナー**
オプザバハビリティやNew Relic の製品概要と基礎知識を学習

New Relic University 200 | **オンデマンドセミナー**
New Relic に含まれる3つの主要機能群を動画で説明

New Relic University 300 | **ハンズオントレーニング**
(エンジニア一般向け) New Relic を実際に操作し、主要機能について習得

New Relic University 400 | **ハンズオントレーニング**
(開発者向け) New Relic の開発者向け機能をハンズオンで学習

エンジニアのデモや価格詳細を問い合わせる

New Relic は実現できることが極めて多岐にわたります。自社環境であれば価格体系や導入方法はどうか？どんなことができるのか？導入に向けた疑問に関しては、一度 New Relic のエンジニアチームのデモを通じて理解することが早道です。以下の URL からデモリクエストや価格などあらゆるお問い合わせに対応しています。

newrelic.com/jp/contact-sales

よくあるお問い合わせのテーマ

課金体系について
購入するライセンス数やライセンスパターン

特定の技術条件について
オンプレミスでも導入可能なのか？利用している OSS 監視ツールと何が違うのか？

サポートについて
採用後にサポートはどの程度行われるのか？日本語サポートはあるのか？